

## これからの英語教育に関する考察 ～グローバルイングリッシュの存在をふまえて～

木村 廣多\*<sup>1</sup> 若杉 祥太\*<sup>2</sup>

<概要>世界の情勢が刻々と変化する中で、グローバル社会に生きる私たちには、世界の多種多様な人々と協調しながら積極的にコミュニケーションを図る能力が求められる。そこで重要な役割を果たすのが英語である。英語は今や世界共通の言語となりつつあり、その言語レベルに差はあれ、現在世界には20億人近くの英語使用者が存在している。

しかし、現在の教育では目標とする人材の育成に至っていないというのが現状である。本研究では、今後求められるであろう英語を話すことのできる人材の育成を目標とした英語教育の形を考察する。

<キーワード>グローバル化, 英語, 公用語, 世界共通語

### 1. はじめに

グローバル化が進む現代では、多くの企業で英語が公用語とされる傾向があり、そのため英語教育の必要性を感じている人々が増えている。それは、英語が世界共通言語として社会的にも大きな役割を果たしていることに由来する(横井,2012)。

しかし、それだけ英語が重要であるにもかかわらず、日本人は社会に出て実践的に英語を使用することが困難な状況にある(横井,2012)。学校での英語教育だけでは十分なコミュニケーションが取れるレベルにまで達することは不可能なのだろうか。

本研究では、平成21年の高等学校学習指導要領にも明記されている「外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりするコミュニケーション能力を養う。」というようなコミュニケーション能力の育成を目的とした英語教育の可能性を考察する。

### 2. 共通語としての英語

現在、世界には6800余りの言語が存在する(木部他,2011)。多数の言語の中で約12%を占め、母語話者数が最も多いのが中国語であるということは疑問の余地がない。英語においては、全体の約7%を占め、中国語の次に多い(図1)。

言語	話者数 (単位:100万)
1.Mandarin Chinese*	726
2.English	427
3.Spanish	266
4.Hindi	182
5.Arabic	181
6.Portuguese	165
7.Bengali	162
8.Russian	158
9.Japanese	124
10.German	121

※北京方言(標準中国語)の話者のみを対象とした数字。

図1 The top of ten languages (神谷,2008)

しかし、ここに母語話者以外の話し手の数を加えると英語が圧倒的な数をもって一位となる。その数はレベルに差はあれ、20億人近くにもなる(神谷,2008)。

### 3. どの英語をモデルに教育を展開するか

我が国の英語教育はアメリカ英語をモデルとして展開されている。しかし、英語と一口にいてもその中身はアメリカ英語やイギリス英語をはじめとして実に多彩なものがある。先に述べたように世界中に存在するほとんどの英語話者は非ネイティブ・スピーカーであるのに、英語使用者全体から見るとほんの一握りの存在である人たちの英語をモデルとして学習することは効率的ではない。また、現在の英語

\*<sup>1</sup> KIMURA, Kota :龍谷大学 e-mail=W110134@mail.ryukoku.ac.jp

\*<sup>2</sup> WAKASUGI, Shota :滋賀県立堅田高等学校 e-mail=wakasugi@lsa-j.org

教育の展開においては英語をろくに話せない生徒が大多数を占めているのも事実である(平泉・渡辺, 1995)。

先で世界には6800余りの言語が存在すると述べたが、そこから新たに生まれた言語がある。それがグローバルイングリッシュである。これは時にワールド・イングリッシュとも表現され、世界中の人々が英語を話す過程で自分たちの必要に応じて変化させてきた英語の事で、欧米型の英語話者の1.5倍近い数の人々が日々の生活の中でこの英語を使用している。この言語を習得すれば、ネイティブスピーカーを含む世界の20億人近い人々とコミュニケーションが取れるようになる。

そこで筆者は現在のアメリカ英語をモデルとして展開している日本の英語教育をこのグローバルイングリッシュをモデルとしたものに変更し展開すれば、目標とする人材の育成が可能なのではないかと考える。

#### 4. グローバルイングリッシュでの教育

目標とする言語から距離のある人々がそれを学ぶ場合、ある特定の誰かの言語をモデルとして学ぶ必要がある。実際に日本でもこれまでは戦前のイギリス英語をモデルとした英語教育の展開や、戦後のアメリカ英語をモデルとした展開のように英語圏の二大勢力の英語が教育の場における中心であった。

しかし、日々変貌する世の中においては、教養としての英語ではなく異言語間、異文化間でのコミュニケーションを可能とする国際語としての英語が必要とされてきている。Quirk,Rは実際にどの文化にも属さないコミュニケーションのための英語としてNuclear Englishという言語モデルを提唱し、これに対する3つの特徴を述べている(図2)。

- |  |
|--|
| <p>① 現在話されているどの英語よりも簡単で、学ぶのに時間がかからない。</p> <p>② コミュニケーションに適したもので、教室での学習だけで十分なレベルに達することができる。</p> <p>③ 学ぶ人口が増えていった場合、必要に応じて言語の拡大が無理なくおこなえる。</p> |
|--|

図2 Nuclear Englishの3つの特徴  
(神谷,2008)

ここで、どのようにグローバルイングリッシュをモデルに教育を展開していったらよいかを考える。上記で述べたように簡素化がグローバルイングリッシュの特徴である。例えば文法に関する簡素化では、付加疑問文に付く最後の..., do you? や..., wasn't she?などを..., isn't that right?や..., is that so?で統一するといった方法が紹介されている。この他にも目的語を2つ取る文型から助動詞に至るまで多数の文法構造に関する簡素化の例が論じられている。そしてこれらを覚えて使いこなすには英語圏の話者でさえも練習が必要になる(神谷,2008)。このように簡素化された英語をもとに英語教育を展開するという考え方は理に叶っている。

#### 5. おわりに

本研究では世界における英語の立ち位置をもとに今後の日本の英語教育の展望の考察をおこない、日々変貌をとげる世の中における英語の有用性と今後の英語を話すことのできる人材を目的とした英語教育の展開に活かすことのできるある程度の可能性を示唆した。

しかしながら、これらをふまえ実際の教育現場でどのように展開するのかと問われると問題は山積みである。今後は英語で積極的にコミュニケーションを図り、情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりするコミュニケーション能力を持った人材の育成を目的としたグローバルイングリッシュをモデルとした授業展開の手法について考察を深めたい。

#### 6. 参考・引用文献

- [1] 神谷雅仁 (2008) 「日本人は誰の英語を学ぶべきか -World Englishesという視点からの英語教育-」 *Sophia Junior College Faculty Journal* Vol.8 41-71
- [2] 平泉渉、渡辺昇一 (1995) 『英語教育大論争』 文藝春秋
- [3] 横井利佳子 (2012) 「日本における英語教師の英語力に関する覚書」『武庫川女子大学大学院教育研究論集』 p153-160
- [4] 木部暢子・三井はるみ・下地賀代子・盛思超・北原次郎太・山田真寛 (2011) 「危機的な状況にある言語・方言の実態に関する調査研究事業 報告書」大学共同利用機関法人 人間文化研究機構 国立国語研究所